シンポジウムⅠ
伝統は近代を変えることができるか
――「野生の思考」の挑戦――

渡　辺　公　三

立命館大学国際言語研究所の春季企画に関連する連続シンポジウムとしておこなわれる「先住民という言葉に内実を与えるために」という４回シリーズの第１回として「伝統は近代を変えることができるか――『野生の思考』の挑戦」ということで３人の方のご報告，４人の方のコメント，ディスカッションをするという組み立てになっております。明日は「先住民の権利と法――近代の力を逆手にとる」というタイトルで３人のご報告が予定されています。

最初に，その狙いを私の方からお話しておきたいと思います。そもそも発端は知里幸恵展と，私の責任で科学研究費をもらっている研究プロジェクトと関連した催しができないかと，前国際言語研究所長の西成彦さんからお誘いを受け，公開の研究会としてシンポジウムをやろうと思い至ったわけです。私たちのプロジェクトでは「土地」の問題を中心に研究を行っています。土地というと私有地に象徴されるような私的所有，人を使って商品生産をする近代的な土地関係がベースになっていますが，近代的な土地関係とは異なる環境・世界との人間の関係のあり方を簡単に言うために，伝統的な多様な関係のあり方として土地という言葉を便宜的に言っています。その関係の可能性のあり方をアメリカやオーストラリア，日本など具体的な事例に基づいて確かめていこうということを一つの目的にして研究会をやっています。

私が属している先端総合学術研究科が「共生」をテーマに掲げ，それにかかわる研究者を育てていきたいということにもかかわって，土地と関係のあり方を明らかにすることが，共生の可能性，不可能性の条件を明らかにしていく道筋になるのではないか，さまざまな生物種――人間もまたそのひ弱な生物種の一つにすぎないわけですが――が共生する条件として土地，環境の世界をどう見直していくかということを中心にしています。知里幸恵展の作品が伝承，伝統の力をもう一度見直せるというメッセージを発信していると考えれば，土地をめぐる研究会をベースにして，このような公開研究会を持つことも趣旨に合っているのではないかと考えて，この会を開催することにしました。

「野生の思考」と副題をつけましたが，伝統的・生態学的知識の問題点をめぐって考えていたのですが，「野生の思考」というのは人類学に関係する人にとっては耳慣れた言葉だと思いますが，近代の「科学的な知識」とはまた違った周りの環境世界とのかかわりのあり方を「野生の思考」とまとめています。現在，いろんな点から注目されているこの「野生の思考」が，これまで100年，200年，近代を突き動かし，リードしてきた思考に，何か別の選択肢を提示しているのか，そういことが最近，議論されていると思います。「野生の思考」を一つの主題に立てて考えてみたいということで講演会を考えてみました。

最初に国立民族学博物館の池谷和信さんに，世界全体にわたって狩猟採集民についてフィールドワークを重ねられている成果の一端をお話いただきます。次に国立民族学博物館の小長谷有紀さんに，モンゴルの遊牧の問題をめぐってお話をいただきます。それから北海学園大学の岩崎・グッドマン　まさみさんにアイヌの生態環境知識の再構築ということでお話をしていただきます。

大阪大学の大村敬一さん，放送大学のスチュアート・ヘンリさんにエスキモー，イヌイトなど北極圏の研究報告をふまえてコメントしていただきます。遠藤彰立命館大学先端総合学術研究科教授に生態学・生物学の視点からのコメント，政策科学研究科院生の春山貴子さんにマレーシアを中心に伝統的生態学の知が，どういうふうに失われていくかまたどのように保全されるべきかについて報告をしていただきます。多様な角度から研究の先端的な現状を示していただきながらお話をしていただきます。

池谷先生からお話をお願いします。